

イスラムの現代的意義

Y・A・ペトロシヤン

江口 満訳

近年、アフガニスタンのタリバンやアルジェリア、エジプト、レバノンのイスラム原理主義グループ、パキスタンのイスラム運動などイスラム諸国での動きや、ホメイニ師の革命に続く最近のイスラムの政治的勝利をみるにつけ、こういった事件や運動に関わっている人々の宗教であるイスラム教に注目せざるをえないのではないかと思われます。これらの動きが政治的な目的の達成を指しているものの、宗教色がはっきりとあらわれていく以上、それは当然のことといえるでしょう。これほどの積極的な政治姿勢は仏教やキリスト教、ユダヤ教など

他の世界宗教にはみられません。もともとキリスト教とユダヤ教は外見は消極的でも、実際はそうでもありません。というのは、ユダヤ教はユダヤ民族統一運動に積極的に関わっていますし、キリスト教は今特にロシアで顕著に見られますが、各派が宣教活動を行っています。最近まで無神論の国であったロシアは各宗教にとっては運動を展開していくのに魅力的な国でありましょう。しかし、キリスト教の宣教活動はそれほど政治的な性格はもっておりません。積極性という面ではさきにあげたようなイスラムの運動とは比較にならないでしょう。

イスラムグループの政治運動は現在のアジア・アフリカ諸国では特別な位置を占めています。それは一見ローカルなものに見えますが、世界の政情安定という意味では一定の危険性をはらんでいます。というのも、これらの動きの多くはその裏にアメリカをはじめとする世界の超大国の利害が見え隠れしているからです。

一例をあげてみましょう。米ソの競争は一九七八年アフガン戦争を引き起こしました。アメリカとパキスタンの利害は今のアフガン情勢をみれば一目瞭然です。タリバンは実はパキスタンのイスラム教の学校で学ぶ学生で、アフガン難民の子弟がほとんどで、アフガン戦争の犠牲者であり、アメリカとパキスタンが展開している政治的駆け引きの道具にされている面が多々あります。アメリカもパキスタンも彼らにとって友好的な安定した政治体制をアフガニスタンになんとしても打ち立てたいのです。そのような体制ができれば自分の経済的な目的を遂げるのに都合がいいからです。アメリカの企業がイランを迂回してトルクメニスタンからアフガニスタン経由でパキスタンの港までガスパイプラインをひくプロジェクト

クトをもっているのはよく知られていることです。アメリカとパキスタンの経済上の目的はアフガニスタンで宗教的スローガンを掲げた戦争という最も野蛮な手段で実現されています。パキスタンはあからさまに、アメリカは隠れて、狂信的なイスラムの一派であるタリバンに軍事的、政治的支援を行っています。しかしアメリカは公然とイスラム原理主義と闘う闘士であると自国を位置づけていますし、他の国に対しては原理主義グループのテロなど過激な行為を非難しているのです。これについてはイランとリビアに対するアメリカの態度を思い出すだけで十分でしょう。パキスタンについては、自国のイスラム過激派には権力を渡すまいとする張りつめた闘いを思うと、タリバンへの支援は、一見奇妙に思えます。しかし、どうやら政治の世界ではいずこも経済的利害が先行するようであります。

ではこれほどの力を持ち、なんらかの政治目的を達するのに便利な武器となるイスラムとはどのような宗教なのでしょうか。現代のイスラム信奉者の闘争的な精神、各国での公然たる政治利害のための妥協なき闘いをみる

につけ、イスラムが本来、世界の創造主たる全知全能の唯一神——それはアラールであるとイスラムの人は考えるわけですが——、その神に対する熱き敬虔なる信仰を旨とする宗教であることとそぐわないような気がします。例えば、仏教徒にしてみれば、異なる信仰をもつ世界の人々に対して、またあらゆる異質なものの、個人の選択の自由といったものに対して極めて攻撃的な宗教があるということは非常に理解しがたいのではないのでしょうか。しかし、イスラムは、厳しい戒律が人間のあらゆる活動に入り込んだ宗教です。しかもイスラムはジハード（聖戦）、つまり信仰のための戦争という極めてアグレッシブな概念をもっています。つい最近もアフガニスタンのタリバンが政敵に対して、彼らはイスラムではなく、異教徒だといってこの聖戦を布告しました。この聖戦という概念はチェチェン紛争でも利用され、民族独立戦争が宗教的スローガンのもとに展開されました。

今地球上で数多くの人々が信奉しているイスラムという宗教が特殊であることは明らかです。イスラムの開祖は七世紀にアラビア半島のメッカに住んでいたアラブ

人、ムハンマドです。ムハンマドの宗教改革は大きな意味をもっています。イスラム教の出現までは、アラビア半島のアラビア人は都市住民も遊牧民も多神教をもっており、土着の神々を信仰していました。現代イスラム世界の総本山であるカーバは今日では毎年巡礼が行われていますが、当時は偶像崇拜の中心的神殿でありました。ここで一つ注目しておきたいと思いますが、ムハンマド時代のアラビアは地理的には若干辺境であつたとはいえ、野蛮な無明の土地では決してありませんでした。交易のルートで、ビザンチンやエジプト、シリアなど当時の主要な文化の中心地と結ばれていたのです。都市に住む偶像崇拜のアラブ人たちはユダヤ教やキリスト教の存在を知っていました。のみならず、キリスト教を信奉するアラブ人も多くいました。しかし、こういった世界宗教と隣り合わせていたにもかかわらず、いずれの宗教もアラブの偶像崇拜を打ち負かすことはできませんでした。だからといってキリスト教やユダヤ教がイスラム教の形成に影響を及ぼさなかったというのはありません。ちょうどムハンマドが布教活動を始めた七世紀頃、

アラビアでは隠修士を中心とするキリスト教がかなり広まっていた。ムハンマドが新しい宗教の開祖として一神教をたて、アラブ人の間に広めていったときも、キリスト教の隠修士と地元のユダヤ人の影響を受けなかったわけではありません。

ここでイスラム教の開祖、ムハンマドについて少しお話ししたいと思います。いうまでもなく、ムハンマドは非凡な人物であり、その存在はいかに才能ある人物が歴史の中で大きな役割を果たせるかということをも物語っています。伝記を見るとムハンマドは幼くして孤児となり、祖父と叔父のもとで育ちます。彼は極めて内省的で、人間の人生に影響を与え、導いてくれているような超自然的な力が世界にあることを直観するような、極めて宗教的な感覚をもった人物であつたようです。

成人してかなり年上の女性と結婚した後、ムハンマドはよくメッカから人里離れた所にいつは瞑想にふけていました。ヒラー山にこもっていたある夜、ムハンマドは眠つたような状態になり、大天使ガブリエルが目の前にあらわれたと彼は言います。ガブリエルはムハンマ

峻厳で、コーランに書かれた神の掟を破つたものは厳しく罰するという神です。ムハンマドはその戒律をできるだけ具体的にメッカの人々に説いていき、イスラムの世界観を与えていきましたが、その中にはキリスト教とユダヤ教の教えも多く取り入れられています。

キリスト教でもユダヤ教でもない、新しい宗教の成立を当時の人々は目の当たりにしていました。そして帰依するアラブ人の数も増えていきました。しかし、それと同時にムハンマドは長い間、同郷の人々からばかにされていました。人々は、ムハンマドのいうような神が、それほど金持ちでも大人物でもない人間に真実を告げるわけがないと思っていたのです。そういったアラブ人達の嘲笑や不信、それを克服していった様子はイスラムの聖典であるコーランにもでています。

しかし、最終的にはムハンマドの布教は大成功を博します。その理由としてはその教えが強く感情に訴えるものであつたこと、そしてそれが極めて豊かな表現力をもつアラビア語でリズムカルな言葉で語られていたこともあるでしょう。イスラムが広まる以前からアラビアには

ドに「唱えよ」と言います。この夢の中でムハンマドが唱えたのは、神直々の言葉であつた、ということです。こうしてムハンマドの預言者としての使命の人生が始まり、ガブリエルを通じてムハンマドに伝えられたものはすべて後にコーランとして知られるようになります。ムハンマドに伝えられた「神の啓示」とは、神はただひとつであり、アラブ人が信じているようなたくさん神がいるのではない、そして神は峻厳かつ全知全能であり、創世主としてこの世界も他の世界もすべてを支配しているということでした。しかし、ムハンマドに告げられた神の言葉の中で最も熱心に語られたのは、アラブの多神教に対する破折の部分でした。神はムハンマドの口を通じて多神教徒のアラブ人に地獄の苦しみを説きました。そして最後の審判の日が訪れて、死んだ人々が生き返り、神が使徒ムハンマドを通じて告げた戒律に従わなかった者は恐ろしい神の裁きを受けることになるというのです。私はここにイスラム教のひとつの特徴があるように思います。つまり、イスラムの神は寛大で慈悲深いという形容はされるものの、まずそれは罰を与える神であり、

高度に発達した美しい詩が作られていたのです。多神教のアラビア人たちはこうして屈服しましたが、それは感動的な宣教の言葉の力だけではなく、武力にもよるものでした。六十二年、ムハンマドは彼を敵視するメッカの住民たちから逃れてメディナへ行きました。これがちにイスラムの人々がヒジュラ（聖遷）と呼ぶようになったもので、この年がイスラム暦の元年となりました。ムハンマドはアラブ・ベドウィンの部族を見方にして、武器を手にもメッカと戦いました。そしてムハンマドの軍事的勝利がアラビア人の新しい宗教の真偽を争うなかで決定的な根拠となつたのです。ムハンマドの信奉者は数を増し、彼が逝去する頃にはイスラム教はアラビアのこの地域に宗教として完全に認められるようになりました。イスラムの普及の過程において、暴力と武力闘争がひとつの重要な要素を占めているのは注目します。ムハンマドの死後、弟子たちは新しい宗教の確立というスローガンのもとに侵略戦争を広い範囲で展開しました。その結果、まず大帝国が樹立され、その後の大イスラム国家群の成立をもたらししました。これらの戦争は宗教の

旗のもとにおこなわれたものの、アラブ人は征服した民族をイスラムに改宗させようなどという壮大な目標はありませんでした。それは甚だ非経済的でもあったのです。侵略者たちにはかなりプラグマティックなところがありました。八世紀のキリスト教ビザンチンとの激戦のさなかでもウマイヤ朝のイスラム指導者たちは、ウマイヤの首都、ダマスカスの寺院を建設するのに、ビザンチン皇帝に優秀な職人の派遣を依頼することにも抵抗はありませんでした。

イスラム教及びイスラム国家の歴史には強制と侵略戦争が多々みられますが、それでもこの宗教が飛び抜けて攻撃的であるとは言えません。例えばキリスト教史をみても、とくに初期の布教段階では各地で多くの強制のあとがみられます。古代ルーシでキリスト教が上から強制的に植え付けられた例をあげるだけでも十分でしょう。スペインのキリスト教の宗教裁判などはもっと激しい侵略性をもっていますし、東方十字軍遠征も中世ヨーロッパの平和の行進ではありませんでした。日本の仏教も最初の頃は暴力を避けてとおることはできませんでした。

六世紀、仏教を擁護した蘇我氏と物部氏との争いを振り返るだけで明らかでありましょう。とはいえ、やはり暴力や戦争がかなり目立ったのはイスラム教誕生後の最初の幾百年間でありましょう。

しかし、ここで重要なのは、イスラムはユダヤ教とキリスト教という二つの古い強大な宗教に挟まれた中で生まれたため、その存続を守るためには攻撃的にならざるをえなかったという点です。もともと、イスラムの教えの中には闘争精神と非寛容を育てるようなテーゼもあります。ムハンマドの究極の使命とは何かというイスラムの教えとも関係があります。ムスリムは、ただ単に自分の宗教が唯一真実のものだと考えているだけではありません。自分の宗教に対するそのような考え方は他の民族にもみられます。イスラムの特徴は、その教えの中にユダヤ教とキリスト教の宗教的遺産をかなり教義の中に取り入れ、融合させているということです。イスラムはモーゼもイエス・キリストも預言者として認めています。特にキリストはイスラム教徒の間でも大変尊敬されています。イスラムの聖典、コーランには聖書に登場する人物

が数多く出てきており、尊敬の念がこもった書き方がされています。それと同時にイスラムの人々はムハンマドをこれまでの預言者の中で最高峰であると考えています。ムハンマドは「預言者の封印」であり、これ以上は使者が遣わされることはありません。言い換えば、ムハンマドによって告げられた神の真実は最終のものであり、人類の目指すところはこのイスラムの神の真実を確信することであるということです。イスラムの信奉者はムハンマドの預言のあとは、すでにモーゼもイエス・キリストの預言も力を失ってしまったと考えます。このような優位性は歴史上の順序で容易に理由付けできるものであり、イスラム教の本質にかかわることです。その優越感情は現在のイスラム運動の理念にもにじみでています。

ひとつだけ例をあげましょう。今のタジキスタンで展開されている反政府イスラム運動はよく知られています。この運動はラフモノフ現政府がイスラムに反しているとして政府の打倒を目指すものです。ちなみにイスラムは、宗教上の規定のみならず、世俗生活、社会生活上

の規定も含んでいますから、どの宗教よりも神権統治の可能性を追求する宗教です。タジキスタンのパミール戦闘隊の隊長、アリマルドン・エルベクがあるインタビューで、イスラム教徒はユダヤ教のアブラハムとキリスト教のイエス・キリストを預言者として認めている、ここにイスラム教の優位性がある、と語っていました。確かに、ユダヤ教もキリスト教もムハンマドを新しい宗教の開祖、預言者としては認めていません。その意味ではパミール戦闘隊長にも一部の理はあるでしょう。しかし、彼の言葉からはイスラム世界観に特徴的な優越感情がはつきりと出ています。このような優越感情はイスラムの特徴的な精神的側面です。しかも、のちに失われてしまったものの、かつてはひとつであった神権政体、そして今も存続している共通の宗教文化の世界は彼等にとって単なる過去の歴史ではないのです。それは現在の世界であり、今も真実の信仰と完全なるイスラムの国家体制のための闘争が行われているのです。

この共通のイスラム世界への帰属意識が、イスラム国家間、及び西側との関係を決めるものになっている面が

多々あります。イスラムはイスラム諸国において文化を形成する要素であるのみならず、政治を形成する要素でもあります。イスラム諸国ほど宗教が政治に大きな影響力をもっているところはありません。現代世界におけるイスラムの状況とその意味はいうまでもなく、世界の政治状況に大きく依存しています。全体の政治的バランスが少しでも変化するとそれはイスラム諸国にも影を落とします。ソ連邦崩壊の後にアメリカ一国がリーダーとなった一極集中の世界も、その意味では不安定化の要因であることを認めないわけにはいかないでしょう。

米ソの政治的・軍事的対立は激しい経済的対立へと変化しました。この経済対立のほうが果たして、世界にとって危険性が少ないのかどうかはわかりません。しかも国家間の政治闘争もまだやんでいません。一極集中の世界でアメリカの対イラン、イラク、リビア政策、パレスチナと戦うイスラエルへの全面支援、——これは複雑な世界情勢の一面に過ぎませんが、イスラム世界の情勢に影響を与えている一面です。

アフガニスタンでも今、世界的な問題が錯綜していま

うか。

イスラム諸国に多くの緊張の火種が集中しているために、いきおい、それらの地域が世界政治の震源地となっています。ユーゴスラビアでは久しく起こっていないかったイスラムとキリスト教徒の政治・軍事対立が近年起こり、それも今申し上げたような動きを少なからず助長しました。イスラム諸国は、世界政治における自身の位置づけを以前からわかっており、それぞれの国が自分なりに情勢を利用してのように私には思われます。

それとともに、見逃してはならないのは、欧米リーダー国の政治・経済・文化面の影響がますます強くなっていることに、イスラム諸国ははつきりとした反応を返しています。これらの国々にとって、思想を軸とする民族的アイデンティティーは政治闘争の重要な武器となりつつあります。恐らく、イスラム原理主義運動は、世界のリーダー格の国々の押しつけが強まって来ていることに対する抵抗であるとするのが妥当ではないでしょうか。親米体制をもつような一部のイスラム諸国でさえ、アメリカという国とその政策は、一定のいらだちを呼ん

す。この受難の国は、経済から政治、イデオロギーといった世界的な問題が寄せ集まってきたといった様相です。ソ連軍撤退後火を噴いた内戦もいままってこの地域の不安定要因を作り出しています。一方、ポストソビエト時代の世界でリーダーの地位を獲得したアメリカは、経済情勢の変化に刺激されて、自国の経済的、そして少なからず政治的な利益を守るために好ましい政治環境をこの地域に作り出しています。アメリカはまずパキスタンを、そして今度はタリバンを使ってアフガニスタンを自らの監督下におくためにやっきになっているのです。そうすることによって、アメリカを利するような状況が多々作られてきます。まず第一に、インドとロシアにとつての脅威が生まれてきます。第二に、アフガニスタン及びパキスタン経由のガスパイプライン建設プランなど、経済的利益が守られることとなります。このような目的達成のためにはアメリカはアフガニスタン国内でさえ人気がないタリバンの原理主義体制を支持することも辞さない覚悟なのです。こういった問題解決のやり方は世界に安定をもたらすことではないのではないでしょ

う。いることも指摘しておかなくてはならないでしょう。

アメリカの経済力、軍事力、そしてアメリカ的資本主義社会の価値観のところかまわぬ拡張はイスラムの民族的価値観、すなわち、イスラムの価値観そのものに対する直接の脅威としてみられているのです。イスラム諸国はほとんどどこでも異質な価値観に対する抵抗をする際には、イスラム的価値観の擁護をスローガンとして掲げています。こうして宗教的なファクターが常に重要視され、むしろますますその意味合いが濃くなってきています。イスラム諸国の反米闘争の最も顕著な例が、近年のイラン革命で、その結果イランではほぼ神権政治に近い体制が打ち立てられました。影でアメリカの応援を受けているアフガニスタンのタリバンでさえ、親米派とみられないように、アメリカからやってくる密使と表立って会うことはできないのです。トルコのような、世俗的な国の体制を明確にし、NATOに加盟している国でさえ、西側の影響に対する防衛反応とみるべきイスラム政治運動がみられます。

イスラム運動の活発化及びその政治的意味合いの深ま

りは比較的ローカルな紛争などにも影を落としています。現在のような状況の中では、宗教的スローガンを掲げるいかなるイスラム政治運動も大きな危険をはらんでいるといえます。政治目標を掲げて戦うイスラムのグループはそれがどんなに小さなものでも、イスラム陣営総体からの無限の応援を当てにすることができのです。そのような闘争は、宗教的スローガンが掲げられることによって、それが聖なる戦いとなり、そうなれば、倫理的にも大義名分が立ちます。それはテロの危険性をますます助長してしまうことになると思はれています。そのような状況を例えばチェチェンに見ることが出来ます。チェチェンではモスクワからの政治的独立、本質的には経済的独立を目指して戦っているグループは、イスラム的スローガンによってこの戦いを聖戦にしてしまっているのです。しかし、この紛争には犯罪組織が深く関与していることも周知の事実です。

さらにまた、世界政治の結果として近年、イスラムは防衛のために攻撃的な態度をとるようになり、イスラム運動がいきおい過激になってきていますが、それが政治

対話を難しくしてしまっています。レバノン南部のように、正当な権利のために戦っている、一部のイスラムグループでもやはりテロを使う戦法をとっており、大きな危険性をはらんでいます。宗教的なファクターに裏打ちされた、思想への狂信的追従は、倫理・政治対話も、妥協も許す余地を全く与えません。もともと、公正を期すために申し上げておきますと、レバノン戦闘部隊に敵対するイスラエルにも、それほど激しくはないものの、宗教的ファクターははっきりと見られます。

イスラム諸国の全体的な政治情勢をみるにつけ、イスラムの世界は、発展をしていく中で、欧米とも、仏教文化が主流であった極東とも、全く異なる独特の宗教文化・世俗文化を作り上げたといえるでしょう。世界は今、明らかに経済レベルだけでなく、宗教・文化という面からも、多極化しつつあります。このような分裂の隠れた危険性を世界はまだ明確には意識していません。宗教を政治目的に乱用したり、複雑な社会・政治問題の解決手段として拡大解釈をしたり、または社会生活において宗教を絶対視したりすることは、ひいては全人類の文化の

中で育まれた他の社会の調整機能を否定してしまうことになります。宗教は文化と切っても切り離せないものではありますが、しかし、宗教だけが文化なのではありません。宗教は本来、人間倫理の調整役として極めて大切なものであります。

イスラム、より正確にはイスラム信奉者は、人類が築いた世俗文化になんの力も意義も認めていないような印象を与えます。彼らは宗教そのものと、宗教によって作られた社会の調整機構を行動規範としており、それらは確かに極めて大切ではあるものの、狭い枠をはめてしまっています。この点はこの社会でも非常に特殊で、微妙な文化の一部です。それ故に、イスラム教徒が他の宗教・文化圏の人々と衝突するといった厳しい状況において、彼等と政治対話をおこなうのが非常に難しくなっているのだと私は思います。

それと同時に、イスラムがどんどん新しい信者を集めている宗教であることは認めなければならないでしょう。中でも最も成功しているのはスーフィ教派という神秘主義的傾向の一派の宣教師です。スーフィズムは文化

的・個人的自由をかなり認める大変柔軟な教義です。しかし、いわゆるオースドックスなイスラムも特にアメリカの黒人の間で発展しています。ちなみに、一方、仏教が西側のインテリ層に人気があることは大変示唆に富んでいると思います。西側では一部例外はあるものの、知識人がイスラムに改宗することはまずありません。現代人類社会の知識階層は個人の自由を絶対的な価値としています。イスラムは、個人の自由が実現できそうな宗教とは彼等の目には映らないようです。イスラム法（シャリーア）にみられ、イスラムを特徴づけている限定的な性格、人間の運命が決まってしまうことを過度に強調する見方は、個人の創造的な生き方の幅を狭め、人生の様々な局面での個人的選択の可能性を限定しています。人生そのものが人間の意識的な努力の結実であり、人生こそが個人の作品であり、日々の自由な選択の結果である、という西側に広まっている考え方はイスラムはかけ離れています。

生活のあらゆる側面にわたって厳しい規則を定めているのはイスラムの特徴ですが、それがムスリムの特殊な

精神面を形作っており、この点が異なる宗教・文化の伝統に生きる人々との交流を難しくしている面が少なからずあります。のみならず、最近のアフガニスタンで見られるように、その厳しい規定は現代西洋社会の価値観に触れたムスリム自身にとっても困難なものとなっています。カブールを占領したタリバンは、イスラムの戒律を厳守して、一日五回寺院でお祈りをし、女性は男性との接触を避けるために職場を即時去るようといった要求を市民につきつけたことは周知の事実ですが、これがアフガニムスリムの隠れた不満を呼びました。この不満はかなり強く、さすがのタリバンも厳しい要求を緩和せざるをえなくなりました。

これと関連して思い出して頂きたいのが、最近のタジキスタンの大統領選挙です。勝利したのは、元共産党のラフモノフで、野党の原理主義派ではありませんでした。その理由のひとつは、女性の支持と、ヨーロッパの影響を強く受けている知識人層の支持が多かったことでした。野党の原理主義派が政権を握った場合に、人権が軽視されることに危惧を示した結果です。

社会が、その社会的・文化的な独自性を主張しており、しかしそれは西側が全人類の価値と考えているものと矛盾するような価値観だという点です。これは個人の自由の基準や倫理観、社会にしめる宗教の位置といった多くの問題に関わってきます。たとえばヨーロッパ人には彼等の価値基準が世界文明の基準に合わないと思えたにしても、やはり、異なる価値観があることを認めて、尊重しながら世界的な政治対話を進めて行くべきでありましょう。このようなアプローチ以外に世界にとって、またイスラム諸国自身にとっても危険な宗教的急進主義の席卷をふせぐ道はないのでしょうか。また、イスラム原理主義についてもテロや違法な闘争手段を使わない限りは、いかに西側世界からみて危険に思えたとしても、存在の権利は認めるべきでありましょう。イスラム原理主義に対抗するのに武力の行使は無用だと私は考えます。政治的安定をはかっていくには、中庸を保ちながら、忍耐強い対話こそ現代の社会に求められていることです。どこの社会でも教育が決定的な力となり、通信手段の発達で世界を結ぶ今日の世界にあつては、どんなに国

イスラム社会が必ずしもムハンマド時代の神権体制の押し付けを支持しているわけではないことは、エジプトやアルジェリアのイスラム原理主義派との激しい政治闘争をみても明らかです。タリバンとの武力闘争を指揮しているアブドウラシド・ドウストウム将軍が、タリバンを「アフガン人を血でもって十五世紀に引き戻そうとして」おり、国の精粹である知識人を撲滅しようとしていると公然と言っていることは注目すべき事実でありましょう。しかもこの将軍はイスラム国家の理想として、一九二〇年代に宗教が国家から分離されたトルコの名をあげています。

私は、イスラムの原理主義的傾向は対外的な政治要因によるところが大きいとみています。現在イスラム諸国が先進諸国から受けている経済的・政治的圧力、一極集中の世界で強まっているアメリカの押し付けは、欧米と宗教的に団結したイスラム諸国との対立をますます深くしていくことでしょう。このような傾向は危険であり、世界の力の均衡を完全に崩しかねません。

対イスラム世界の問題で極めて重要なのは、イスラム

家間、宗教間の障壁があつたとしても全人類的な文化の融合と寛容性は必然的なプロセスです。

世界の複雑な政治問題を解決する際に忘れてはならないのが、多様性という普遍的な原則があるということです。それは自然が至るところで証明をしてくれているとおりです。この多様性の原則こそが世界のバランスを支えてくれるものです。

(Y・A・ペトロシヤン、ロシア科学アカデミー・

東洋学研究所サントペテルブルク支部前所長

(訳・えぐち みつる)

(本稿は一九九六年十一月二十九日に行われた当研究所主催の公開講演会での講演原稿です)